

91. 東京医学校本郷移転再考

- 東京大学本郷キャンパス成立に関する研究 萌芽期 -

Reconsideration of the relocation of Tokyo Medical College to Hongo

- A study on the formation history of the Hongo campus, the University of Tokyo, germination period -

森 朋子
Tomoko Mori

The purpose of this paper is to trace the background of the relocation of Tokyo Medical College to Hongo at the early Meiji era through the historical documents' review in order to understand its very early origin. The Ueno Plan had two period, 1) for Medical College and its hospital and 2) for the concentration of existed colleges. Hongo was initially considered as a campus for newly establishment of vocational colleges such as engineer and agriculture industry and commercial colleges. At the time when Tokyo Medical College moved to Hongo, the campus had already been shared with the Tokyo Kaisei-Gakko, whose campus had been merged into Hongo later as the University of Tokyo.

Keywords: Tokyo Medical College, the University of Tokyo, Ueno, Hongo, Campus Planning

東京医学校, 東京大学, 上野, 本郷, キャンパス計画

1. はじめに

1-1. 背景・目的

明治維新は、我が国に近代高等教育をもたらし、明治10(1877)年、東京大学は東京医学校・開成学校を統合して創設され、今年140周年を迎えた。赤門や三四郎池に象徴される江戸時代の面影を継承する東京大学本郷キャンパスが元加賀藩江戸屋敷(以下、元加賀藩邸)であったことはよく知られている。一方、かつて上野に建設計画があり、ボードウィンの建議で中止されたこともよく知られるが、「医学校及び病院の上野移転が何故かとも困難であったのか、またその移転先が資料で見るとかなり唐突に本郷に変更されたのは何故かは明確には判らない」¹⁾とされている。

東京大学の歴史は、五十年史²⁾、百年史³⁾、医学部百年史⁴⁾などで教育制度の歴史を中心に、他にも豊富な文献があり⁵⁾、⁶⁾、明治初期の大学成立過程に関する研究⁷⁾や、昨今では医制立案の視点から上野移転計画の背景も考察されている⁸⁾。また、本郷キャンパスに関しても、歴史に関する文献⁹⁾、¹⁰⁾の他、明治10年の東京大学創設以降の東京大学本郷キャンパスの形成と変容に関し、オープンスペースの編成形式の観点から明らかにされており¹¹⁾、東京帝国大学時代の外構整備の特色¹²⁾も論じられている。また、本稿に係る大学キャンパスの全般的な成立史は、近代建築史の視点から明らかにされている¹³⁾。明治政府に上地された武家地処理に関する論考からは、東京大学の敷地に関し、時系列に並べた変遷概要が明らかにされている¹⁴⁾。しかし、これらの研究からは、本郷への移転計画に至る背景が、十分明らかにされているとは言い難い。

本稿は、明治9年11月、東京医学校の本郷移転を東京大学本郷キャンパス成立の画期と捉え、その移転背景を明らかにすることから、今日の本郷キャンパスを新たな視点で

捉え直すとともに、近代大学キャンパス史の一端を補うことを目的としている。

1-2. 方法

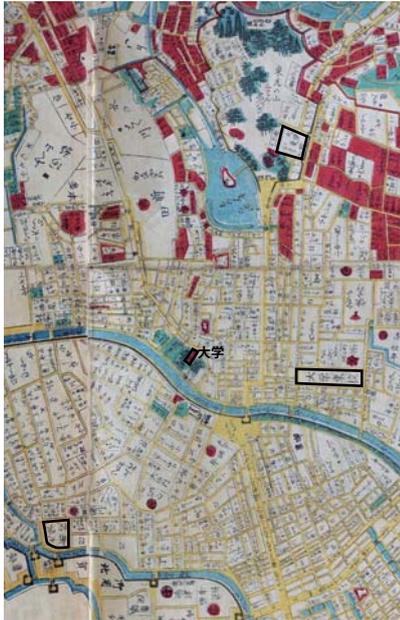
本研究は、本郷への東京医学校移転に至る背景を、上野計画、本郷計画の一連の流れから論ずるものであり、上野計画の変遷と東京医学校移転先になるまでの元加賀藩邸の変遷に関しては、上野・本郷に関わりをもつ文部省・陸軍省の動向を踏まえながら整理することを基本に進めた。

本郷への移転計画に至る背景に見られる大学東校(東京医学校前身)・大学南校(開成学校前身)の校地について概観し(2章)、大学東校・大学南校から出された校地移転の建議書や回顧録より校地・キャンパスに関する記述を抽出することから上野移転の計画変遷の把握を試み(3章)、明治維新から東京医学校の本郷移転までの元加賀藩邸の変遷と当時の議論から、東京医学校移転先である元加賀藩邸におかれた用地としての価値を捉え、さらに東京医学校建設計画の考察を加え(4章)、新たな知見として提示していく。

本稿は、明治2年大学東校・大学南校以降、明治9年11月東京医学校本郷移転までを東京大学本郷キャンパス成立萌芽期として論じるものである。なお、大学東校・大学南校は、教育制度の改変に伴い名称が2回変更され、明治7年東京医学校・開成学校に至った。本稿では特段の関連がない限り、便宜上、東京医学校・開成学校に名称変更されるまでをそれぞれ大学東校・大学南校と呼ぶこととする。

本研究は、太政類典、公文録、東京都公文書、文部省往復、東京医学校營繕伺願史料、回顧録等を中心にした文献調査によるもので、特に絵図面を丁寧に扱った。引用に際し、回想録は旧字体のまま引用し、その他は適宜旧字体を新字体に改め、引用・参照の際には適宜補注において補い、日付に関しては史料に記載のあるままで引用した。

2. 移転前の校地



左図1 大学・大学東校・大学南校 (出典: 永福東京御絵図¹⁵⁾)



上図2 明治初年の上野寛永寺跡 (出典: 東京大学医学部百年史⁴⁾)

明治政府は、徳川幕府の三つの機関(昌平黌、開成所、医学所)を昌平学校、開成学校、医学校として復興し、明治2年にはそれぞれ大学(国学・漢学)、大学南校(社会・人文諸学)、大学東校(医学)となった。図1は、その位置を示したものである。旧武家屋敷を転用した学校は、早くから移転願を出している。凹地にあった大学東校は、明治3年5月には、「高燥」で類焼「火災無」¹⁶⁾との観点から、幕末の上野戦争で大部分を消失した上野山内寛永寺境内への移転を願い出た。図中上野東叡山中に「大学東校ごようち」と記された一角が確認でき、具体的に移転計画が実行されていたことが推測できる。大学南校もまた「土地卑湿」¹⁷⁾の地にあり、学校敷地を模索していた。

明治初期における近代高等教育は、立地環境の課題を抱えながら進んでいった。次に、この上野移転計画について、その後の一連の流れを見ることから考察を加える。

3. 上野計画

3-1. 上野計画一連の流れ

まず、上述した明治3年の大学東校の上野山移転願以降、明治7年本郷用地決定までの一連の流れについて、表1に整理した。山内一体を医学校・病院とした計画(第1期)から、明治6年前後以降の専門学校を集結させた構想(第2期)へと推移したことがわかる。次に、第1期・第2期別に計画や構想を確認する。

3-2. 第1期構想

中心人物であった相良知安^{注1)}の下で画策した石黒忠恵による回顧録に、当時の様子を垣間見ることができる。

「其設計の内には、今の車坂町邊から、山下、坂本まで、共頃下寺と稱した今日の汽車發着所一帶の地には一大浴療所を設け、鐵道が開通するに従ひ全國の温泉を其處に取寄せて湯治を爲し得る様なもあつたのです。それで

表1 上野計画年表

明治年月日	上野・本郷、専門学校に関する事項抜粋	史資料
3年	5月 (大学→東京府) 大学東校を上野山内建設せんと請す(元藩邸は凹の地→高燥、火災無、適地は上野)	太政1
	10月15日 ボードイン解約帰国に付謁見	太政外人
4年	7月18日 文部省設置	
	7月28日 大木喬任、初代文部卿に	
	8月 レオポルト・ミュレル来日	
	10月 (兵部省伺) 上野山内の地管轄の申請	太政2兵
	(兵部省伺) 本郷金沢邸内白金台岡山邸請求	太政2兵
	10月22日 南校近傍に於て諸科学学校設立地を定む	太政2大
5年	1月12日 (文部省) 専門学校を設け志願の生徒入校許す(理学化学法医学重学星学)→2月29日専門学校を閉じる	太政2大
	3月5日 (陸軍省伺) 上野山内において兵学寮建設地を求む	太政2兵
	5月29日 (南校→文部省) 当校生徒の儀につき伺(南校の土地卑湿)	太政2大
	7月4日 東校教師館を上野山内へ新築する	太政2学
	7月9日 (南校→文部省) 専門大学校に充附駿台大学校建設ノ儀(高燥の地)	太政2大
	8月3日 文部省「学制」発布→大学「理学化学法医学数学」設置	
	9月14日 (文部省伺) 第一大学区中専門大学校取説の儀、専門諸学校東叡山へ	太政2大
	11月 (文部省→正院伺) 第一番中学寄宿舎建築伺	公文6/48
	11月27日 文部省所轄上野御用地増地の儀	太政2大
6年	1月4日 (文部省伺) 文科・法科・理科・醫科等専門の學校上野山内へ設立	太政2大
	1月8日 専門学校を上野山内に設立を許す	太政2大
	1月15日 (太政官布達第16号) 東叡山寛永寺境内の類、借來の地とし公園と定める	
	2月28日 (文部省) 第一番中學寄宿舎文部省にて建築す	太政2大
	3月25日 (文部卿大木喬任伺) 東京府囚獄地本郷四丁目元金澤藩邸を専門学校の場所にす伺、工業・鉱山・商業・農業、地勢高燥平坦前条諸学校設立に於いて必適場所(東京府→大蔵省へ経営方針策申) 浅草寺、寛永寺、増上寺、富岡八幡、飛鳥山を公園	記録文部
	3月27日 (正院達) 上野山内文部省用地御用に付上地(太政官→東京府) 其府用地本郷元加州邸正院御用上地→文部省用地に	東京都
	3月28日 (陸軍省伺) 上野旧本坊上地するにあたり、本郷旧加州邸ノ内にて換地御渡の儀伺	公文6陸
	4月9日 (大木文部卿申立) 「理學校の如きは醫學校と相離るべからざる次第もあり」	太政2大
	4月10日 第一大学区第一番中学校を改め開成學校と稱す	太政2大
	4月26日 (開成→文部省伺) 諸藝・工業學校、陸軍省御用地小川町練兵所に創建伺	文部往復
	4月28日 文部省「学制二編追加」頒布→専門学校構想	
	同日 (文部省) 諸藝・工業學校、陸軍省御用地小川町練兵所不可各所に分立不可、文部省用地(元丸龜・静岡・豊津県邸)選択	文部往復
	5月 (陸軍省伺) 上野山内上地に付代地取許方伺(本郷→駒込水戸邸へ)	公6陸上
	5月22日 醫學校等建築の爲上野山内の地を分割して文部省に属す	太政2大
	6月7日 (開成→文部省伺) 諸藝・鉱山學校を本郷元加州藩邸に創建伺	文部往復
	6月9日 (文部省) 新築・在來校舎にて開業せよ	文部往復
	7月14日 (文部省) 新築校舎は専門科教場、從來校舎は外國語學校へ	文部往復
	8月8日 (文部省伺) 開成學校新築模様を替えて學校の体裁に変え築造	太政2大
	8月12日 (開成→文部省伺) 從來校舎を外國語學校、新築校舎を法・理・諸藝・鉱山専門教場に、元静岡県邸を自費寄宿舎に	文部往復
	8月14日 (文部省) 12日の伺の通り許可	文部往復
	11月 上野山内専門医學校築造の儀も今日迄躊躇(明治7年定額金の儀伺、文部小輔田中不二磨→右大臣岩倉具視)	大隈文書
7年	1月25日 (医學校→文部省) 建築經費下渡願、ミュレル以下6名建白書、上野山内医學校及び病院建築の儀	公文文部
	4月5日 (文部卿→太政大臣) 東京医學校及病院設立の儀に付き再三伺	公文文部
	4月22日 (文部省) 二万五千六百円別途下渡	公文文部
	4月27日 (文部省→医學校) 凡7万円で講堂病院寄宿舎等至急会計課取計らい	當繕本省
	8月12日 太政官達第106号 焦眉ノ急ニアラザルノ費途ハ一切止メ可申	
	10月30日 (医學校→文部省) 当校建築の儀	當繕伺済
	11月4日 (文部省) 本郷用地内可(本郷用地に決定)	當繕伺済

(出典: 太政1¹⁶⁾、太政2大¹⁷⁾、太政2兵¹⁸⁾、太政2学¹⁹⁾、記録文書²⁰⁾、公文6/48²¹⁾、公文文部²²⁾、公文6陸²³⁾、公6陸上²⁴⁾、東京都²⁵⁾、大隈文書²⁶⁾、當繕本省²⁷⁾、當繕伺済²⁸⁾、文部往復²⁹⁾、太政外人⁴¹⁾により作成)

山王臺即ち今の美術協会の所から鶯谷一帯の地に病院を建て、病院の散歩場から下谷浅草一帯を瞰下し得るやうにし、今の竹の臺邊には各教室を設け、谷中道の東側には大寄宿舎を建てるといふ雄大な計画圖面を造りました。」³⁰⁾

編集追記に、学内でこの計画図面の一部が発見されたとあり、図3がこれにあたりと考えられる。図4の原典は、石黒忠恵の孫が持つ石黒忠恵旧蔵資料である。回顧録と照らし合わせると、図3では中堂までの山の約半分、およそ76,800坪が敷地となっていることから、回顧録にある山内全域を使った雄大な計画は、後に発展したであろうことが推測される。図4には浴場の計画がみられるが、縮尺や具体的な配置が不明なため、これ以上は推測の域を出ない。

一方、この計画は、ボードインの建白により中止されたことは知られているので触れないが、明治3年10月に帰国の謁見をしており、5月の建設願いから約半年足らずで、順調に進んだ計画が急に中止されたことが推測できる。

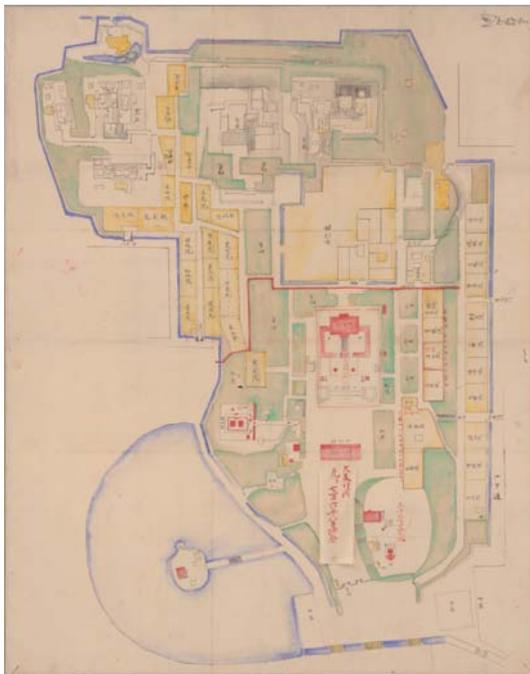


図3 大学東校上野移転計画 (東京大学医学部図書館所蔵)

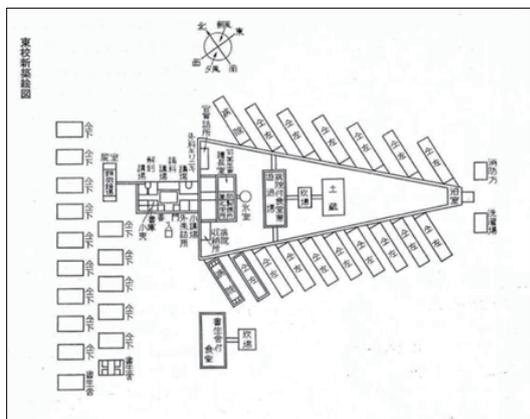


図4 東校新築絵図 (出典：東京大学医学部百年史⁴⁾)

レオポルト・ミュルレルは、明治4年8月、明治政府が日本の医育制度樹立のため正式に招聘した最初のドイツ人医学教師である。彼も回顧録を残している。

「用地を十分に調べた上で、まず学校が校舎を建てる原案を作成した。その附属建物とし、取り敢えず二棟のバラックを建てる。全体は日本風の二階建てで、外側は漆喰壁で塗り固めるが、障子や襖を嵌める個所は、西洋風の扉や窓に替えることにし、バラックの内部の設備は全部西洋風にするようになった。この計画の利点は、全建築計画を今直ぐ一挙に実施することを要せず、幾棟かのバラックが出来た後に、同型のものなら直ぐ設置することができ、その他の型のものやもっと大きい建物ならば追々と工事にかければよいし、全計画を必要に応じて容易に拡張しうる点にあった。」³¹⁾

以上より、計画は一旦中止されたが、その後も継続した検討の存在が判明したが、図4との関係はわからない。

3-3. 第2期構想

明治5年9月14日、文部省からの伺い書にて、上野山内に専門諸学校建設の構想が確認できる。検討して私有地のため叶わなかった駿臺用地に比べても、「地勢高燥にて別段差障も無」¹⁷⁾く、医学校を建築しても多分の残地があるので、現在の東照宮から上野動物園にかけて、専門諸学校建設用地として増地を願い出ている。次の明治6年1月4日の伺いから明らかな通り、ここで言う専門諸学校とは大学南校と大学東校であり、上野に一体的に設置する計画であった。

この案が以降公園計画との狭間で中止と、さらに陸軍省用地を本郷への換地により再拡大があったことは明らかになっており³²⁾、また、最終的に上野計画が実現できなかったことは、明治6年11月の伺いにある経済面からの「躊躇」と、さらに万国博覧会開催の主導者である大久保利道の存在があることが推測されている³²⁾。

4. 本郷計画

4.1 明治維新後の経緯

元加賀藩邸は、明治元年の本郷春木町で出火した火災により、御殿を含む大部分を消失している。隣接する大聖寺・富山藩屋敷(含み元加賀藩邸)は、「御両家様御屋敷は御別状無」³³⁾で被害がなかった。

明治4年、前田家が南の一部を私邸として所有し、残りが上地されて以降の元加賀藩邸の経緯を追ったところ、東京医学校用地に至る前までに三つの画期が存在したことがわかった(表2)。一つは明治4年、この地が東京府の囚獄用地とされた時点、二つは文部省が専門学校用地として引き渡しを願い出、文部省用地となった時点、三つは上野本坊跡陸軍省用地との換地場所として文部省と協議がなされた時期である。次に、それぞれを概観する。

(1) 東京府囚獄用地

元加賀藩邸が東京府囚獄用地であったことを知る史料は、明治4年10月の兵部省伺い及び通達である。「陸軍としては、四年には東京のあいている邸で坪数の相当広くとれる

所はどこでも手をうつて用地にしようとしたようである」³⁴⁾との通り、本郷もその対象となっている。しかし、通達によると、すでに開拓使からあった要望にも囚獄掛必要の地として断つたとあり、兵部省に引渡ししが難しいであろう旨通達している。明治5年の記録からは、乞食・囚人の工作場として、またロシア皇太子来日時には、市中に浮浪する乞食を一時的に収容する場所として使われ、その後上野に設置される養育院の前身的な存在となった。

(2) 文部省専門学校建設用地

当時の文部省は、「実事」に関する専門学校を設置するために、まず元中山従一位邸を工業学校用地として確保した。しかし、後に左院によって上地されることとなり、工業学

表2 本郷・元加賀藩邸、文部省用地への経緯

明治年月日	本郷旧加賀藩邸に関する事項抜粋	史資料
元年	4月17日 本郷邸類焼(御殿焼失、御両家様御屋敷は御別条無) →富山・大聖寺藩邸残る	加賀
	10月9日 本郷邸及び平尾邸下賜	加賀
	10月27日 天皇氷川神社行幸の途、本郷邸の物見所で休憩	加賀
3年	10月29日 天皇氷川神社行幸の途、本郷邸の物見所で休憩	加賀
4年	6月 東京府に本郷邸の一部を私邸として下附願	加賀
	7月14日 廃藩置県→東京府用地に	
	10月 (兵部省へ通達) 本郷金澤邸白金臺岡山邸引渡伺→東京府 囚獄掛必要の地、開拓使からの要望も断つたので難しい	太政2兵
5年	7月 (東京府→司法省) 元加州邸新築牢舎御用地内元富山邸に 乞食・囚人の工作場設置	東京府
	10月15日 東京府、ロシア皇太子来訪につき浮浪乞食を元加州邸空長 屋に臨時収容→上野護国院へ移設し東京府養育院へ	区史
	11月13日 (文部兼教部卿大木喬任)元中山従一位邸を工業学校へ伺	公文6/48
6年	1月18日 元中山従一位邸を工業学校とする→後6月、旧中山従一位 邸へ転院の達(左院)、文部省工業学校地を上地される	太政2学
	3月25日 (文部卿大木喬任)東京府囚獄地本郷四丁目元金澤藩邸を 専門学校(工業・鉱山・商業・農業学校)の場所にする伺	記録文書
	3月27日 (太政官→東京府) 其府用地本郷元加州邸正院御用に付き 上地 (正院達) 上野山内文部省用地御用に付上地	東京都
	3月28日 (陸軍大輔→正院) 上野本坊跡地上地の換地として本郷旧 加州邸東京裁判所用地の内、2万5千坪引渡し願 →朱字訂正:伺いの土地は文部省管轄地	公文陸
	4月17日 (陸軍大輔代理→正院) 旧加州邸の内、至急2万5千坪引 渡願	公文陸
	4月19日 (東京府→正院) 当府囚獄御用地本郷元金澤縣邸、市ヶ谷 谷町に替地伺	法令類
	4月28日 「学制二編追加」頒布→専門学校構想	
	5月8日 (正院→文部省) 本郷金澤縣邸地所御渡可 (東京府) 市ヶ谷町二於テ囚獄敷地購求	法令類
	5月9日 (正院→東京府) 本郷元金澤縣邸其府囚獄地文部省へ引渡 し、市ヶ谷谷町を換地	東京府
	5月14日 (太政官→陸軍省) 伺いの文部省所管地、引渡し問題なし	公6陸上
	5月17日 (太政官→文部省) 旧加賀藩邸内から2万5千坪引渡せ	公6陸上
	5月24日 (文部省→正院) 陸軍省から朱色の区域以外不可との回 答、そこは当省学校設立用地、飛墨区域なら引渡可能だ が、そこは経費がかかるというのでしかるべき処分を願	公6陸上
	5月30日 (陸軍卿代理→正院) 別紙朱引を文部省へ要求したが、黒 点の他は引渡せない回答→地形悪く使えない	公6陸上
	6月5日 (陸軍中將→正院) 文部省との協議が整いそうにない。陸 軍砲口学校建築のため平地必要→当省希望通り沙汰願	公6陸上
	12月5日 (右大臣→それぞれ陸軍省、文部省、東京府) 元水戸藩の 土地引渡す。開墾地につき、開墾経費文部省負担し東京府 より上地→文部省、陸軍省へ引渡すこと。	公6陸上

(出典: 加賀³³⁾、太政2兵¹⁸⁾、太政2学¹⁹⁾、記録文書²⁰⁾、公文648²¹⁾、東京
都²⁵⁾、東京府²⁵⁾、区史³⁶⁾、公6陸上²⁴⁾、法令類²⁷⁾により作成) (太字: 画期)

校はここに設置されなかったが、これが元加賀藩邸を文部
省用地にした契機となった。文部卿大木喬任は、工業・鉱
山・商業・農業といったより「実事」に関する専門学校用
地として、自らの署名で東京府囚獄用地の引渡しを明治6
年3月25日に願い出ている。この伺い書には、元中山従一
位邸を工業学校用地として着手できず、ふさわしい場所を
「捜索中」に元加賀藩邸を見つけ、「地勢高燥平坦」で学校
設立において「最適の場所」であり、これを「工業学校鉱
山学校商業学校農業学校等」用地としたいことが記されて
いる。東京府囚獄用地は市ヶ谷谷町に換地され、元加賀藩
邸は明治6年3月27日、文部省用地となった。

(3) 陸軍省砲口学校建設用地としての換地

明治6年3月27日、上野では文部省・陸軍省用地が上
地される達が出た。文部省用地になって一日後の3月28
日、砲口学校建設用地を失った陸軍省は、元加賀藩邸のう
ち25,000坪の換地を願い出た。この伺い書には、「東京裁判
所用地」とあり、朱字で「文部省用地」と訂正されている。

陸軍省は、元加賀藩邸内の朱点線区域の土地を希望した
(図5)。しかし、文部省は墨点区域以外を引き渡せない
とし、両者の協議は難航する。この朱点線区域は、元加賀藩
邸の育徳園(三四郎池)を含む御殿空間に重なる。墨点区
域とは、図5中の東の元大聖寺・富山藩邸部分、または南
側の部分の二箇所を指している。文部省は、このいずれか
であれば引渡してもいいとするも、砲口学校建設用地を求
めていた陸軍省は、これらの地を「早濕凸凹之地」で費用
がかかることを理由に、朱点区域を要求し続けた。結局、
右大臣の発案で隣の元水戸藩邸を換地されることとなり、
元加賀藩邸は文部省用地として残された。

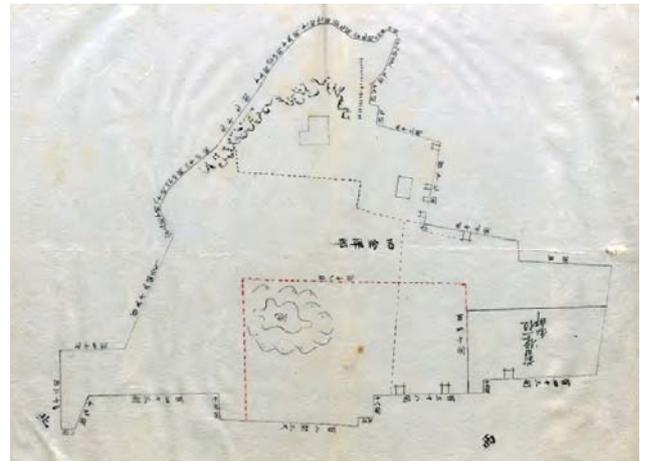


図5 旧金澤邸図(出典: 公6陸上²⁴⁾)

4.2 東京医学校移転

そして、東京医学校の移転である。前述の通り、上野計
画は経済的要因と権力者の差配によることが推測された。
ここで、東京医学校関係者、特に上野計画の中心人物であ
った相良知安に関する回顧録と、「相良知安先生記念碑文」
を参照し、当時の様子を垣間見る。

「醫学校の敷地に就きては當初相良氏の配意にて上野境内と定まり屢々新營の設計もありつれども、上野は歴史上の土地といひ市内無雙の名勝なれば首府の第一公園に充つへしとの説政府部内で行はれ、醫校新築の事の如き遷延決しかたきの情實ありしかば更に前田邸を相することゝはなりしなり。」³⁸⁾

「上野一帯ノ地ニ医学校及大学病院ヲ新築シ長橋ヲ不忍池ニ架シ以テ交通ニ便ナラシメントセリ而カモ一部ノ反對ニ遇ウテ果ス能ハス先生乃チ政府ニ逼リ其代償トシテ本郷ノ舊加賀藩邸ヲ得テ以テ醫学校建設地ニ充テントヲ請ヒ之ヲ許サル」

相良知安先生記念碑、昭和10年3月



図6 相良知安先生記念碑

先に見た石黒の回顧録にも、「換地として、本郷の加賀前田屋敷、今の東京帝國大學の敷地が交付された」との記述があり、上野を諦める「代償」が本郷であったことがわかる。

4.3 東京医学校・病院建築計画

ようやく明治7年11月24日、文部省より29,644坪が引渡された。図5と図7を見比べたところ、東京医学校用地は、陸軍省との交渉で、文部省が引渡し可能とした地であり、両省が学校用地として主張し続けた御殿空間とは異なっている。文部省は、学校用地として整備費負担の少ない御殿空間ではなく、「早湿凸凹之地」を東京医学校用地とした経緯はわからないが、明治6年6月には医学校から、元富山邸・元大聖寺邸を生徒養生所として借用願が出されており、外国人教師館も建設されていることから、もう一つの墨点区域である南の地を東京医学校用地にあてたことが推測される。

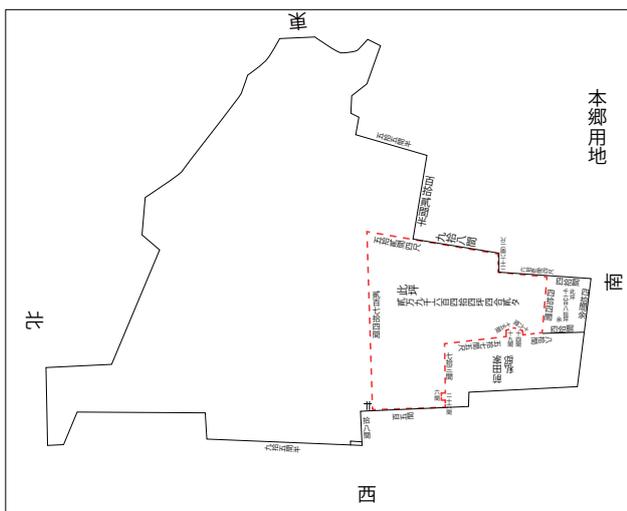


図7 本郷用地内東京医学校建築地 (出典：『營繕同済』³⁹⁾ に筆者加筆)

前田家から突出した土地の献上も受け、その後敷地の変更が見られる。明治8年10月27日、東京医学校から文部

大輔への願い書には、甲を「開成学校共有の見込を以て返納」する代わりに、乙を「代地」として引渡しを求め、丙は「当校教師館建築を見込む」も「開成学校共有地」としており、同年11月4日に乙の引渡しを受けている(図8)。なお、甲は元加賀藩邸時代には馬場として使われていた地で現在も御殿下グラウンドとして継承されている。図8中右下には、「開成学校新築教師館」、「モルレー氏居館」表記があり、また甲・丙は「開成学校共有地」との記述からも、本郷文部省用地には、東京医学校地、開成学校共有地、医学校教師館、開成学校教師館が存在したことが確認できる。

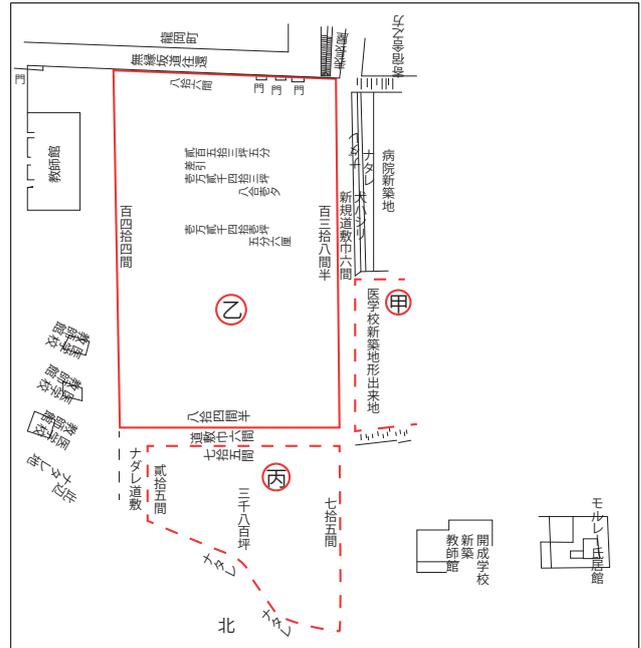


図8 東京医学校建設予定地 (出典：『營繕本省願伺届』⁴⁰⁾ に筆者加筆)

明治13-14年の医学部一覽に添付された図面(図9)から、移転後のキャンパスを詳細に見ることができる。「別課医学教場」とある建物は、元富山藩の御殿であった。既存家屋を転用し校舎に使っていたことがわかる。これが、後に現在の山上会館の地に移築され、その下のグラウンド(図9中「図8中『甲』」)が御殿下と呼ばれる所以となる。

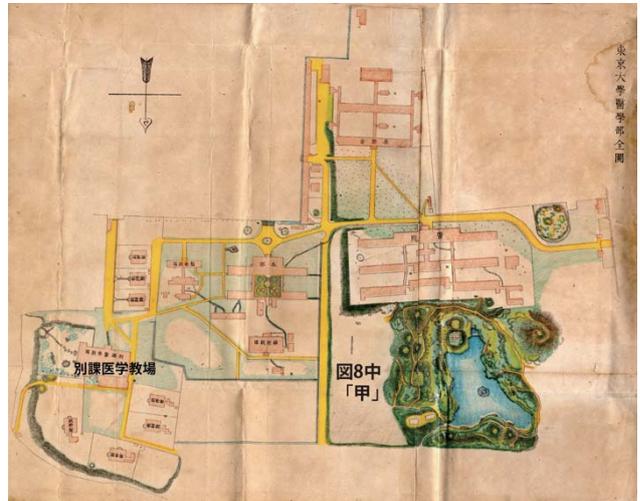


図9 東京大学医学部全図 (東京大学医学部図書館所蔵に筆者加筆)

5. 結び

以上、東京医学校本郷移転の背景を、上野計画、本郷計画別に再考した結果、以下の二点が明らかになった。

一つは、東京医学校建設用地の変遷が明らかになった。上野計画では、山内一体を医学校・病院とした計画（第1期）と、既存の専門学校を集結させた計画（第2期）が存在した。東京府囚獄用地とされていた本郷元加賀藩邸は、この第2期と並行し、当時の文部卿大木喬任の建議により新しく工業・鉱山・商業・農業といった「実事」に関する専門学校用地として獲得された。その翌日、第2期計画により上地された陸軍省の上野用地の換地として、早速本郷文部省用地が登場する。文部省は怯まず陸軍省の要求する御殿空間を固守した。結局、政府の財政と当時の首脳部の意向が反映されたか、上野への移転計画は本郷移転と相殺する形となって消滅し、東京医学校が本郷文部省用地に移転するに至った一連の流れを明らかにした。

二つは、文部省本郷用地の一部を引渡された東京医学校が、開成学校との共有地を設けながらキャンパス整備を進めた点である（図10）。後に、この共有地には運動場と寄宿舎が整備されたことから、東京医学校建設当初より、キャンパスの必要機能の一つである運動空間等を他学と共有する形で存在させようとする意図があったことを明らかにした。

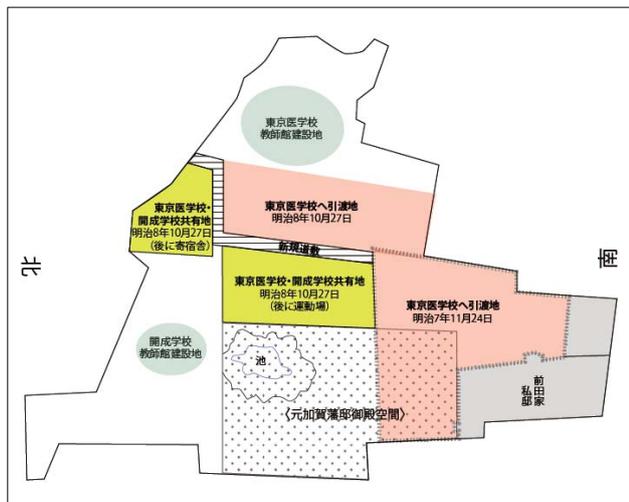


図10 東京医学校移転計画時の文部省本郷用地略図

結果的に我が国最初の総合大学の嚆矢となる本郷元加賀藩邸は、文部省自らが見出し獲得し、紆余曲折を経ながらも近代高等教育環境整備の重要性を認識しつつ、またそれを成立させようとした萌芽が存在したことが明らかとなった。ただ、整備面の観点以外で元加賀藩邸内の一等地である御殿空間を東京医学校用地にしなかったことは、再考の価値があると思われる。なお、千葉県国府台の大学建設計画が並行して存在していたことや、後に本郷に移転する開成学校の配置計画との関連は、次の課題としたい。

補注

(1) 相良知安 (1836-1906) は、明治2年医学校取調御用掛に任用され、ドイツ医学の採用を決定し、ミュルレルとホフマンを明治4年に招聘した。文部

省医務課長、築造局長などに就任したが、同年、更迭された。昭和10年東京大学校内にその業績を顕彰して記念碑が建てられた。

参考文献

- 1) 東京大学百年史編集委員会 (1984)「東京大学百年史 通史一」, p.394, 東京大学出版会
- 2) 東京帝國大學編 (1932)「東京帝國大學五十年史」, 東京帝國大學
- 3) 東京大学百年史編集委員会 (1984)「東京大学百年史 通史一」, 東京大学出版会
- 4) 東京大学医学部創立百年記念会東京大学医学部百年史編集委員会 (1967)「東京大学医学部百年史」, 東京大学出版会
- 5)「東京大学の百年」編集委員会 (1977)「東京大学の百年」, 東京大学出版会
- 6) 寺崎昌男 (1992)「プロムナード東京大学史」, 東京大学出版会
- 7) 玉井建也 (2014)「『文部省往復』からみる明治初期の『大学』成立過程」, 東京大学史紀要, 32, pp.1-pp.13
- 8) 尾崎耕司 (2016)「明治『医制』再考」, 大手前大学論集, 16, pp.15-53
- 9) 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会 (1988)「東京大学本郷キャンパスの百年」, 東京大学総合研究資料館
- 10) 木下直之ら (2005)「東京大学本郷キャンパス案内」, 東京大学出版会
- 11) 岸田省吾 (1997)「東京大学本郷キャンパスの形成と変容」, 東京大学学位論文
- 12) 西村公宏 (1997)「明治期、大正前期における東京帝国大学本郷キャンパスの外構整備について」, ランドスケープ研究, 60(5), pp.431-436
- 13) 宮本雅明 (1989)「日本の大学キャンパス成立史」, 九州大学出版会
- 14) 東京都 (1965)「明治初年の武家地処理問題」, pp.215-218, 東京都
- 15) 吉田屋三郎 (求版) (1871)「永福東京御絵図」
- 16) 太政類典第1編第百十八巻
- 17) 太政類典第2編第百四十九巻 大學
- 18) 太政類典・第二編・明治四年～明治十年・第二百一十一巻・兵制十・鎮台及諸庁制置一
- 19) 太政類典・第二編・明治四年～明治十年・第二百四十五巻・学制三・学校
- 20) 太政官・内閣関係、第11類記録材料、記録材料・文部省伺書類
- 21) 公文録・明治六年・第四十八巻・明治六年一月～三月・文部省伺 (一月・二月・三月)
- 22) 公文録・明治七年・第百六十九巻・明治七年四月・文部省伺 (布達)
- 23) 公文録・明治六年・第三十巻・明治六年五月・陸軍省伺
- 24) 公文録・明治六年・第三十七巻・明治六年十二月・陸軍省伺上
- 25) 明治6年公文書・東京府「明治六年正院御用留 自一月至十二月」, 東京都公文書館所蔵
- 26) 田中不二磨 (1873)「明治七年文部省定額金ニ関スル上申書」, 『大隈重信関係文書』, 早稲田大学所蔵 (請求番号イ14A1485)
- 27) 東京医学校「明治七年一月ヨリ同八年十二月マテ 營繕本省諸方来翰」
- 28) 東京医学校「明治七年一月ヨリ八年十二月ニ至ルノ營繕同濟」
- 29) 「文部省往復」, 東京大学所蔵
- 30) 石黒忠憲 (1936)「徳舊九十年」, pp.150-151, 博文館
- 31) 石橋長英ら訳 (2008)「1888年レオポルド・ミュルレル『東京-医学』」, 日本国際医学協会 (1975年復刻)
- 32) 田中正大 (1963)「上野公園の成立」, 造園雑誌, 27(1), pp.24-31
- 33) 前田勝雄 (1980)「加賀藩史料 幕末編下巻」, 清文堂出版
- 34) 東京都 (1965) 前掲載, p.180
- 35) 明治5年公文書・「明治5年指令原按下」, 東京都公文書館所蔵
- 36) 本郷区役所 (1985)「本郷区史」, 臨川書店
- 37)「法令類纂巻之四十六」, 東京都公文書館所蔵
- 38) 長與專齋 (1930)「松香私志」, pp.43-44, 長與又郎
- 39) 文部省 (1874)「本郷用地内東京医学校建築地」, 東京医学校『明治七年一月ヨリ八年十二月ニ至ルノ營繕同濟』
- 40) 東京医学校長代理文部省五等出仕三宅秀 (1933)「学校建築地所並同所地形費請求方の儀に付願」, 東京医学校『自明治七年一月至八年十二月營繕本省願同諸方掛合回答』
- 41) 太政類典草稿・第一編・慶応三年～明治四年・第五十八巻・外国交際・外人参朝及贈遺